From 1862 to 1868

～日本の歴史のほんの一部～

① 生麦事件（1862.8）

アメリカのペリーの来航以来、盛んになった攘夷（じょうい）の運動は井伊直弼の大弾圧（安政の大獄）によって抑えられつつあったが横浜、箱館（今の函館）、長崎の３港の開港によって攘夷派の人々が外国人を襲撃する事態が起きていた。桜田門外の変で井伊直弼が暗殺されてからはますます活発になった。なかでも 1862.8 に起きた生麦事件は薩摩藩の大名行列に差し掛かった 4 人のイギリス人が殺傷され、イギリス代理公使（ニール）は幕府と薩摩藩に賠償金などを求め幕府は10万ポンドを払ったが薩摩藩は犯人の引渡しと賠償に応じなかった。

② 薩英戦争（1863.7）

生麦事件での賠償などに応じなかった薩摩藩に対し（前項）イギリスは、7 隻の艦隊で鹿児島湾に入って犯人の処刑を要求したがこれに応じなかったため薩摩の軍船３隻を拿捕（だほ）したがこれは交渉を有利に進めるためのものではなかった。これに対し薩摩藩は即座に開戦を決定しイギリス艦隊に向かって砲撃を開始した。しかし薩摩藩は大国の力を知り、対するイギリスも被害が大きく薩摩藩は賠償に応じ、犯人は見つけ次第処罰するということで合意した。

③ 四国艦隊下関砲撃事件（1864.6）

長州藩は攘夷実行のため馬関海峡※1を封鎖し、航行していた外国船舶を攻撃。これに対し報復として米仏が長州藩の砲台を砲撃し、海軍に打撃を与えた。これにより長州は攘夷の不可能を実感し窮地に立たされていたが脱藩の罪で投獄されていた高杉晋作に講和を一任しほぼ米仏の要求を受け入れ講和が成立した。

④ 薩長同盟（1866.1）

1865、土佐を脱藩した坂本龍馬は同じく脱藩した中岡慎太郎と長州藩と薩摩藩を提携させるため動いていた。一方長州・薩摩藩側は八月十八日の政変によってどちらも重要性は認識していたが、なかなか進まなかった。そこで龍馬は亀山社中を通じて薩摩藩の名義で長州藩の武器を買うという計画をし、長州藩（木戸孝允）と薩摩藩家老（小松帯刀（たてわき））を会わせてなんとか同盟を成立させた。

⑤ 第 2 次長州征伐（1866.6）

幕府の将軍徳川家茂は江戸から西上して大坂城に入った。そして 9 月に長州征伐の勅許を得る。このとき薩摩はすでに薩長同盟（前項）を成立させていたため幕府に出兵拒否を申し入れ、長州側も回答がなかったため、総勢 15 万の幕府軍は 6 月に四方から攻撃を開始する。対する長州側は総勢数千人だったが海外から輸入した最新の洋式兵器を備え幕府軍に対抗した。そして連敗の報告が届く中大坂城で 1866.7.20 徳川家茂が病没した。この後出陣する計画もあったが徳川慶喜は勝義邦（よしくに）（勝海舟）を派遣して講和を結んだ。

⑥ 大政奉還（1867.10.14）

第2次長州征伐ですっかり幕府は威信を失い、長州・薩摩藩などに倒幕の密勅が出る中、その日に徳川慶喜は大政を奉還した。この慶喜の奇計により薩長は武力倒幕の大義名分を失った。

⑦ 戊辰戦争（1868.1）

1868.1 薩摩長州藩兵を中心とする新政府軍と、旧幕臣や会津・桑名藩兵を中心とする旧幕府軍との間に、京都の近くで武力衝突が起こった（鳥羽・伏見の戦い）。これに勝利を収めた新政府軍は、徳川慶喜を朝敵とし西郷隆盛を中心として江戸へ軍を進めた。西郷隆盛と勝海舟の交渉の末、江戸は戦火を交えることなく新政府軍に占領された。一部の幕府軍は抵抗したが新政府軍に破れ次々に降伏した。

⑧ 王政復古の大号令（1868.12.9）

大政奉還を行った慶喜（前項）だったが実質的に大政奉還後も徳川家が実質的に政権を担っていた。大政奉還とともに出された慶喜の辞職願は保留とされていた。対する討幕派の岩倉具視は越前藩や土佐藩とともに 12.9 に王政復古を断行することを決め御所の諸門を守衛することを命じた。そして西郷隆盛の指揮で諸門を固める中復権したばかりの岩倉具視が王政復古の大号令を発した。これにより幕府は正式に廃止された。

※1 いまの関門海峡のあたり